１１月号　アグリワークポイント（米

『今年の作況は「やや良」』

水稲の作況は、適度な日照時間や雨があり生育が順調なため、中部１０３で「やや良」と発表されました。しかし、台風による倒伏などで品質や収量への影響が心配されます。

今夏は、台風によって猛暑になったり急に涼しくなったり、周期的に気温が変動しました。梅雨入りが早く、春からの低温傾向が継続し梅雨寒になりました。ところが、６月下旬から暑くなり梅雨明けも早くなりました。台風６号通過後は急に涼しくなってしのぎやすい日が多くなり、８月に入ると暑さがぶり返し、お盆の頃から涼しくなったものの、月末から９月にかけ台風１２号が紀伊半島に記録的大雨をもたらし、きびしい残暑が中旬も続いて夏はなかなか終わりませんでした。そして、台風１５号は、大きな被害をもたらし秋らしい陽気となりました。

このような気象から田植時期や品種・土質・地力によって生育や品質に差が出ています。

《水稲収穫後の水田管理》

作業機械の整備・点検や畦畔、圃場環境の整備を進めるとともに、来年の栽培に向けた「土づくり」の大切な時期です。地温の高い時期に、「耕起作業」を行い稲藁の腐熟を早めましょう。年内耕起により雑草の塊茎が地表面に露出し、冬季の乾燥や凍結により死滅させる効果があり耕種的防除になります。

①農業機械施設の整備

それぞれの農業機械の取扱説明書に従って点検整備を必ず行い、農業機械を格納しましょう。

②ジャンボタニシ駆除に「石灰窒素」

稲藁腐熟促進も兼ねて、１０～１５kg（１０ａ）を施用します。ジャンボタニシは貝殻が薄く傷つきやすいので、ロータリー耕で貝を破壊し、密度を減らします。作業速度を落として、ロータリー回転数を上げて、いっきに耕耘することで殺貝効果が高くなります。さらに用水路も主な越冬場所なので、冬期間は水路をできるだけ落水、乾燥させ、清掃しておくことも駆除に役立ちます。

③有機物施用

（１）稲藁のすき込み・・・

稲藁は、現在の地力を維持するために可能なかぎり全量すき込みましょう。収穫後、なるべく早くすき込めば分解も早まります。腐熟促進のため**「わらゴールド」**３０～４５kg（１０ａ）や石灰窒素を散布してからすき込みます。ただし、排水不良田に多量に稲藁をすき込むと有害物質が発生しやすくなるので注意しましょう。

（２）堆肥施用・・・

一般的には１０ａ当たり１～２ｔが施用量の目安で、なるべく年内に施用します。連年施用することで化学肥料の減肥も可能になります。

④各種土作り資材の施用

　珪酸質、鉄分などを含んだ肥料を投入することも有効です。**「とれ太郎」**や**「珪酸カリ」**（１０ａ当り４０～６０kg)は、肥効が高く、散布量も少なくてすむ省力的な土づくり肥料です。根の活力強化や病害虫・倒伏抵抗性を高め健康な稲体を作り、玄米チッソ含有率（タンパク質）を低下させ食味向上を図ることができます。

　藤枝営農経済センター　原田